OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カメルーン・グラスランドにおける伝統的衣裳 : その素材と他部族との関連性
Author(s)	井関, 和代
Citation	デザイン理論. 1998, 37, p. 84-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52842
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カメルーン・グラスランドにおける伝統的衣裳
── その素材と他部族との関連性 ──

井関和代／大阪芸術大学

カメルーン・西北部州に広がるグラスランドには，現在もなお伝統的首長国を形成する民族集団が居住する。これらの王国では「藍染絞の木綿布・ンドップクロス（Ndop）」を所有し，儀礼布に使用している。だが，この地域の諸族の間で伝承される染織技術は，ラフィアヤシ繊維を素材とするものであって，木綿布による藍染め・絞りの製作はない。

彼らにとっては外来品の「藍染絞木綿布」が，何故，王権社会の伝統的表徴品として受け入れられるようになったのか。1995年度，上記のテーマで現地調査を行い，藍染紋布の流入の歴史や社会背景を調査した。また藍染絞布の流入時期と同じ頃に，使用され始めたヨーロッパ製工業木綿布についても調査した。

本会では諸王国の一つ，ンゲンバ（Ngenba）族の王国・バフツー（Bafut）を事例に取り上げ，藍染絞布の入手，他部族との関連性，その使用，また藍染絞布を代表とする「外来品―布」に対する「意識」を，その文化・社会的背景の変容と展開を通じて紹介し，また，現在のグラスランドに普及している外国産・自国産プリント布地についても，どのような位置にあるのかを報告した。

1．調査地の概要

調査は，現王（Abumbi Ⅱ 1968年着位），王の仕立師 Thoms Thangyie 氏（1932年生，1940年より王の従者として出仕。調査時は筆頭重臣。稼業に貴族・重臣用の仕立屋を営む），重臣 Shu samuel Munsho 氏（1920年生，1933年にプリント布を入手し下帯使用。1960年に現代タイプの一式をはじめて新調）を主に，王国の人々より行った。

彼らからの聞き取りではバフツー王国は，16世紀半ばに，現在のフンバン（Foumban）北方より，イスラム勢力を恐れて移動してきたという。伝承では第1代王（Fir-lu 1593～1646）が王国を形成し，第5代王（Chunga 1756～86）の治世時に王のみが腰衣として藍染絞布を使用。第6代王（Ngwa・Bi 1786～1822）の時，貫頭衣形態の衣裳が流入し，王・高位貴族の一部がこれまでの樹皮布から木綿布の褌へとなる。そして第8代王（Achirimbil 1852～81）の頃より，ナイジェリア・ハウサ族系の衣裳の影響を受けた現在の王国の伝統的民族衣裳の形態が完成した。また，グラスランドの諸王国の儀礼に広く使用されてきた「藍染絞布」の出所も，隣接するナイジェリア南東部である。バフツー王国ではパルミュラ油・鉄製品・奴隷などを以てナイジェリアのハウサ系ジュクン（Jyukun）族より入手してきたという。

2．藍染絞布の使用情況

2－1　新王の着任式

バフーツ王国の藍染絞布の使用には，先ず新王の着位式がある。1932年，第9代王の死去にともない，現王の着位式の際，神殿内での新王の衣裳は樹皮布であった。儀礼の後，新王は輿で王家の広場に運ばれ，村人から投石を受けた（つまり，この世における俗人として行った非礼をすべて解消する）。この後，宮殿に隠り，7日後に王の広場に現れ，村人から祝福を受ける（Ndu-o-nforamkolaa）。この隠遁の間に王の従臣たちが晴れ着の素材

に藍染絞布を用意し，王の仕立師が衣裳を整えた。かつては裁縫技術は秘密とされ，この技術を用いた衣服は王のみが使用した。

2－2　王のダンスの日（Aben）

王国における収穫祭，参加する村人全員が伝統的衣裳を着飾り「王の広場」でダンスを楽しむが，広場の一角に藍染絞布が張りめぐらせる。また御神宝の祖霊男神の腰布に藍染絞布が使用され，他に王座の敷物・壁面，王の従者の衣裳に藍染絞布を結界的に使用する。

2－3　貴族の着位式

宮殿内の神殿で行われる新しい貴族の着位式に出席する重臣・従臣たちの衣裳は，近年製作の豪華なものよりも，入手した時期に価値を求め，古色の衣裳を誉れとする。

2－4　王の葬儀

宮廷内の神殿に埋葬される王の身体を包む布に，藍染絞布を使用するという。

3．素材と他部族との関連性

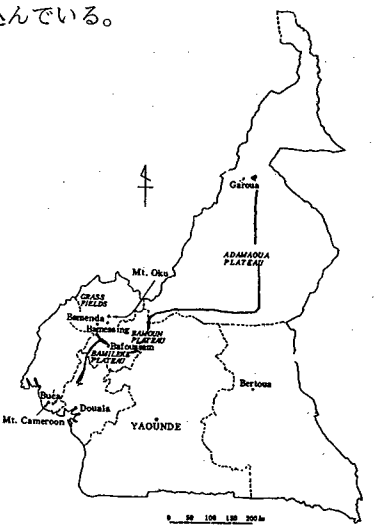
グラスランドで産出する農作物・鉱物は，同地域内における他部族との交易に相互的な補完関係を築いた。また，隣国のハウサ族系から布の入手には，王国の軍隊組織（Ngumba）下にある，少年たちの教育（森の学校）にナイジェリアへの交易の旅を成人儀礼とした。

4．ま と め

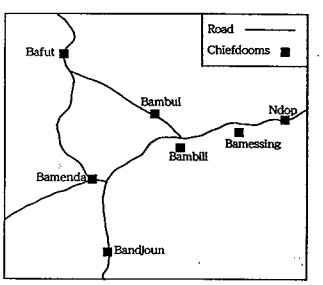
各王国における藍染絞布の使用法は，バフツー王国とは，多少異なりをみるものの，いずれも葬喪儀礼につながり，王家の神権表徴，生ける神（現王）と祖霊を包むものであった。これは彼らが祖布「樹皮布」を使用していた頃に「藍染絞布」が移入され，これが王権威信財となったことをものがたる。またプリント布地による衣裳の形態も，貴族と一般人との身分区分とされ，現在にいたっている。そのため伝統的木綿布，初期のオランダ製ワックスプリント布による衣裳には，確たる価値感が育まれている。

しかしながら，伝統的衣裳を入手することを条件とする王による村人承認式を受けていない人たちの間にも，青色のプリント布地の衣裳が普及し，「藍布」に王権をみる通念が次第に消滅しつつあり，また権威の布として存在してきた藍染絞布も一般に広がりつつある。

一方，宮廷でもさまざまな意匠の布やイスラム形態による，新しい伝統衣裳の製作に取り込んでいる。



地図Ⅰ　カルメーン全図



地図Ⅱ　調査地グラスランドの一部